

## 線形写像 解答例

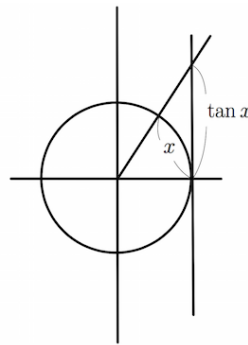
## 全単射に関する問いの解説

(1) 勝手な元  $a \in [0, \infty)$  に対し,  $x = \pm\sqrt{a}$  とすると  $f(x) = a$  となるので,  $f$  は全射. 一方,  $a \neq 0$  に対し,  $x = \sqrt{a}, y = -\sqrt{a}$  とすると,  $x \neq y$  だが  $f(x) = f(y)$  となるので単射ではない.

(2)  $f$  が全単射であることを示す. 図の様に, 単位円周上の点  $(1, 0)$  を通り  $y$  軸に平行な直線  $\ell$  を考える. 原点を通り角度  $x$  の直線  $\ell'$  を考えると,  $\ell$  と  $\ell'$  の交点は  $(1, \tan x)$  で与えられる.

全射性:  $a \in \mathbb{R}$  を任意の実数とすると, 図より  $a = \tan x$  となる  $x$  が存在することが分かる. よって  $f$  は全射である.

単射性: 図より,  $\tan x = \tan x'$  ならば  $x = x'$  となることが分かる. よって  $f$  は単射である. (直接計算でも確かめられる.)



## 問題 1.

(1)  $f$  は線形写像でない. 実際,  $\sin(x+y) = \sin x \cos y + \cos x \sin y$  だから  $x = \frac{\pi}{4}, y = \frac{\pi}{4}$  に対し  $f(x+y) = 1$  だが  $f(x) + f(y) = \sqrt{2}$  である.

(2)  $f$  は線形写像である. 実際,  $\mathbf{x} = (x_1, x_2, x_3)$  と任意の実数  $c \in \mathbb{R}$  に対し

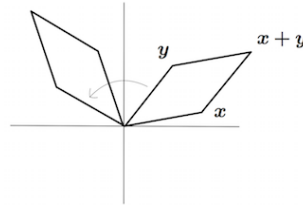
$$\begin{aligned} f(c\mathbf{x}) &= (cx_3, 5cx_2 - cx_1) \\ &= c(x_3, 5x_2 - x_1) \\ &= cf(\mathbf{x}). \end{aligned}$$

また  $\mathbf{x} = (x_1, x_2, x_3), \mathbf{y} = (y_1, y_2, y_3)$  に対し,

$$\begin{aligned} f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) &= (x_3 + y_3, 5(x_2 + y_2) - (x_1 + y_1)) \\ &= (x_3, 5x_2 - x_1) + (y_3, 5y_2 - y_1) \\ &= f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}). \end{aligned}$$

(3)  $f$  は線形写像でない. 実際  $f(\mathbf{0}) = (1, -1) \neq \mathbf{0}$  となっている.

- (4) 平面上のベクトル  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  及び  $\mathbf{x} + \mathbf{y}$  は図の右側の平行四辺形の各頂点で与えられている。このとき、原点を中心として反時計回りに角度  $\theta$  回転したベクトル  $f(\mathbf{x}), f(\mathbf{y})$  及び  $f(\mathbf{x} + \mathbf{y})$  は、左側の平行四辺形の各頂点に他ならない。従って  $f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y})$  が成立している。



同様に、任意の実数  $c \in \mathbb{R}$  に対し  $f(c\mathbf{x}) = cf(\mathbf{x})$  となることが確かめられる。

さて  $\mathbb{R}^2$  の標準基底  $\mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  を原点中心に  $\theta$  回転させれば、 $f(\mathbf{e}_1) = \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}, f(\mathbf{e}_2) = \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix}$  となることが分かる。従って、基底  $\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2$  に関する  $f$  の表現行列は

$$\begin{pmatrix} f(\mathbf{e}_1), f(\mathbf{e}_2) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

で与えられる。よって

$$f(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$$

が成立する。

## 問題 2.

- (1) 勝手な定数  $c \in \mathbb{R}$  に対し、 $f, g$  の線形性より

$$g \circ f(c\mathbf{x}) = g(f(c\mathbf{x})) = g(cf(\mathbf{x})) = cg(f(\mathbf{x})) = cg \circ f(\mathbf{x})$$

が成り立つ。また、勝手な  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in V$  に対し

$$\begin{aligned} g \circ f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) &= g(f(\mathbf{x} + \mathbf{y})) \\ &= g(f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y})) \\ &= g(f(\mathbf{x})) + g(f(\mathbf{y})) \\ &= g \circ f(\mathbf{x}) + g \circ f(\mathbf{y}) \end{aligned}$$

が成り立つ。よって  $g \circ f$  は線形写像。

- (2)  $f(\mathbf{x}) = \mathbf{0} \Leftrightarrow \mathbf{x} = \mathbf{0}$  が成立しているとして,  $f$  が単射となることを示す.  $f(\mathbf{x}) = f(\mathbf{y})$  とすると,  $f(\mathbf{x} - \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) - f(\mathbf{y}) = \mathbf{0}$  となるので  $\mathbf{x} - \mathbf{y} = \mathbf{0}$ . 従って  $\mathbf{x} = \mathbf{y}$  となる. 逆に  $f$  が単射であったとする.  $f$  が線形写像なので  $f(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$  となることに注意すれば,  $f(\mathbf{x}) = \mathbf{0} \Leftrightarrow f(\mathbf{x}) = f(\mathbf{0}) \Leftrightarrow \mathbf{x} = \mathbf{0}$ .

**問題 3.**  $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{v}_2 = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$  とすると, これらは  $\mathbb{R}^2$  の基底であり, 勝手な  $(x, y) \in \mathbb{R}^2$  は  $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2$  の 1 次結合として  $(x, y) = (x+y)\mathbf{v}_1 + y\mathbf{v}_2$  と表せる. すると,  $f$  の線形性から

$$\begin{aligned} f(x, y) &= f((x+y)\mathbf{v}_1 + y\mathbf{v}_2) = (x+y)f(\mathbf{v}_1) + yf(\mathbf{v}_2) \\ &= (x+y)\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} + y\begin{pmatrix} -2 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x-y \\ x+y \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

**問題 4.**

- (1)  $f$  の線形性より, 勝手な  $\mathbf{x} \in \text{Ker} f$  および  $c \in \mathbb{R}$  に対して

$$f(c\mathbf{x}) = cf(\mathbf{x}) = c\mathbf{0} = \mathbf{0}$$

なので  $c\mathbf{x} \in \text{Ker} f$  となる. 同様に, 勝手な  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \text{Ker} f$  に対し

$$f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}) = \mathbf{0} + \mathbf{0} = \mathbf{0}$$

なので  $\mathbf{x} + \mathbf{y} \in \text{Ker} f$ .

以上により,  $\text{Ker} f$  は定数倍と足し算で閉じた  $V$  の部分集合であるので, 部分ベクトル空間である.

- (2)  $(x, y, z) \in \text{Ker} f \Leftrightarrow x + z = x + y = y - z = 0 \Leftrightarrow z = y = -x$  である. 従って,  $\text{Ker} f = \{(x, -x, -x) \mid x \in \mathbb{R}\}$  と書ける. つまり  $\text{Ker} f$  は 1 次元の部分ベクトル空間で, 基底は例えば  $(1, -1, -1)$  が取れる.

**問題 5.** 基底  $1, x, \dots, x^d$  に関する  $f$  の表現行列を  $A$  とする.  $1, x, \dots, x^d$  は  $f$  によって

$$\begin{aligned} 1 &\mapsto 1, \\ x &\mapsto x - 1, \\ x^2 &\mapsto (x - 1)^2, \\ &\vdots \\ x^d &\mapsto (x - 1)^d \end{aligned}$$

と移されるので

$$\begin{aligned} &(1, x - 1, (x - 1)^2, \dots, (x - 1)^d) \\ &= (1, x, x^2, \dots, x^d) \begin{pmatrix} 1 & -1 & 1 & \dots & (-1)^d \\ 0 & 1 & -2 & \dots & (-1)^{d-1} \\ \vdots & 0 & 1 & & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \dots & 0 & 1 \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

つまり

$$A = (a_{ij})_{1 \leq i, j \leq d+1}, \quad a_{ij} = \begin{cases} 0 & (i > j) \\ (-1)^{i+j} C_{i-1} & (i \leq j). \end{cases}$$

**問題 6.** 条件 (1), (2) を満たす線形写像  $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2$  の基底  $(1, 0), (0, 1)$  に関する表現行列を  $\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$  とする. 定理 1 を使えば, 条件 (1) は

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \\ \Leftrightarrow \begin{pmatrix} a^2 + bc & b(a+d) \\ c(a+d) & d^2 + bc \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \end{aligned} \quad (*)$$

と書き直せる. 条件 (2) は, 連立方程式

$$\begin{cases} ax_1 + bx_2 = x_1 \\ cx_1 + dx_2 = x_2 \end{cases}$$

の解  $(x_1, x_2)$  が  $(0, 0)$  のみであることを意味する. 従って, 条件 (2) は行列式に関する条件

$$\begin{vmatrix} a-1 & b \\ c & d-1 \end{vmatrix} \neq 0 \quad (**)$$

と同値である.

以下場合分けして (\*) と (\*\*) を満たす  $a, b, c, d$  を求めよう.

i)  $a + d = 0$  の場合. (\*) より  $a^2 + bc = 1$  である. また, 場合分けの仮定より  $d = -a$  なので, (\*\*) の行列式は

$$(a-1)(d-1) - bc = (a-1)(-a-1) + (a^2 - 1) = 0$$

となる. これはおかしいので,  $a + d = 0$  では有り得ないことが分かった.

ii)  $a + d \neq 0$  の場合. (\*) は

$$b = c = 0, \quad a^2 = d^2 = 1$$

と同値である. これを (\*\*) に代入すると  $(a-1)(d-1) \neq 0$  つまり  $a \neq 1$  かつ  $d \neq 1$  なので,  $a = d = -1$  でなければならない.

以上より, 表現行列は  $A = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$  に限る. つまり条件 (1), (2) を満たす  $f$  は  $f(\mathbf{x}) = -\mathbf{x}$  に限る.

別解: 標準基底に関する  $f$  の表現行列を  $A$  とする. 単位行列を  $E$  とおけば, 条件 (1) より  $A^2 = E$  が成立する. 零行列を  $O$  とおけば,  $A^2 - E = (A + E)(A - E) = O$  が従う. 一方, 条件 (2) より  $(A - E)\mathbf{x} = \mathbf{0} \Leftrightarrow \mathbf{x} = \mathbf{0}$  なので,  $A - E$  は正則行列. 結局  $A + E = O$  でなければならない.

**問題 7.**  $V$  の基底  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  を何でもよいから固定し, この基底に関する  $f: V \rightarrow V$  の表現行列を  $A_f$  とする.  $A$  が正則であることと  $A_f$  の行列式がゼロでないことは同値だった. (前期プリント第 8 回「行列式の計算」定理 12 参照.)

まず,  $f$  が全単射ならば行列式はゼロでないことを示す.  $f$  の逆写像  $f^{-1}: V \rightarrow V$  を取り, 基底  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  に関する  $f^{-1}$  の表現行列を  $A_{f^{-1}}$  とする. 定理 1 より

$$A_f A_{f^{-1}} = A_{f \circ f^{-1}} = A_{1_V}$$

で, さらに恒等写像の表現行列  $A_{1_V}$  は単位行列  $E$  と等しい. よって  $A_f A_{f^{-1}} = E$  となる. 同様に  $A_{f^{-1}} A_f = E$  となることもわかる. よって  $A$  は正則である.

逆に  $A_f$  の行列式がゼロではないと仮定する.  $A_f$  は正則行列なので,  $A_f$  の逆行列  $B$  が存在し,

$$A_f B = B A_f = E$$

を満たす. そこで線形写像  $g: V \rightarrow V$  を

$$(g(\mathbf{v}_1), \dots, g(\mathbf{v}_n)) = (\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n) B$$

によって定めれば, これは  $B = A_g$  を意味する. 定理 1 より

$$A_{f \circ g} = A_f A_g = A_f B = E = A_{1_V}$$

つまり,  $A_{f \circ g} = A_{1_V}$  が成り立つ. 一般に, 2 つの線形写像の (同じ基底に関する) 表現行列が等しければ, それらは写像としても等しい. よって  $f \circ g = 1_V$  を得る. 同様に  $g \circ f = 1_V$  が成り立つ. これは  $g$  が  $f$  の逆写像ということに他ならない.

**問題 8.** ベクトル空間  $U$  の元  $u \in U$  および勝手な実数  $c \in \mathbb{R}$  に対し,

$$f(cu) = (cu(0), cu(2\pi)) = cf(u).$$

また,  $u, v \in U$  に対し

$$\begin{aligned} f(u+v) &= ((u+v)(0), (u+v)(2\pi)) \\ &= (u(0), u(2\pi)) + (v(0), v(2\pi)) \\ &= f(u) + f(v) \end{aligned}$$

が成り立つ. よって  $f$  は線形写像.

$U$  の基底  $\cos(nx), \sin(nx)$  の行き先を調べると

$$\begin{aligned} f(\cos(nx)) &= (\cos(0), \cos(2\pi)) = (1, 1), \\ f(\sin(nx)) &= (\sin(0), \sin(2\pi)) = (0, 0) \end{aligned}$$

なので,  $e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  とおけば

$$(f(\cos(nx)), f(\sin(nx))) = (e_1, e_2) \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$$

が成り立つ. つまり, 求める表現行列は  $A = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$  である.

### 問題 9.

(1) 任意の  $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in V$  に対して  $d = -a$  なので,  $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & -a \end{pmatrix} = bX + cY + aH$  と書ける. つまり,  $V$  の任意の元は  $X, Y, H$  の 1 次結合で書ける. また,  $bX + cY + aH = \mathbf{0}$  ならば  $b = c = a = 0$  だから  $X, Y, H$  は 1 次独立である.

(2) 任意の  $A \in V$  に対し  $f(A)$  がちゃんと  $V$  の元になっていることを確認しよう.  $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & -a \end{pmatrix}$  とおけば  $f(A) = HA - AH = \begin{pmatrix} a & b \\ -c & a \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} a & -b \\ c & a \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 2b \\ -2c & 0 \end{pmatrix}$  となる. (1, 1)-成分と (2, 2)-成分の和が 0 なので, 確かに  $f(A) \in V$  である.  $f$  が線形写像であることは明らかだろう.

次に, 基底  $X, Y, H$  に関する表現行列を計算する.  $f(X) = \begin{pmatrix} 0 & 2 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} = 2X$ ,  $f(Y) = HY - YH = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ -2 & 0 \end{pmatrix} = -2Y$ ,  $f(H) = HH - HH = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} = \mathbf{0}$  となる. 従って,

$$(f(X), f(Y), f(H)) = (X, Y, H) \begin{pmatrix} 2 & 0 & 0 \\ 0 & -2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}.$$

つまり表現行列は  $\begin{pmatrix} 2 & 0 & 0 \\ 0 & -2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ .

(3)  $f^2(H) = f(f(H)) = f(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$ . 数学的帰納法により, 任意の  $n \geq 1$  に対して  $f^n(H) = \mathbf{0}$  であることがわかる. また,  $f^2(X) = f(f(X)) = f(2X) = 2f(X) = 4X$ . 同様に  $f^3(X) = f(f^2(X)) = f(4X) = 4f(X) = 8X$ . 数学的帰納法により, 任意の  $n$  に対して  $f^n(X) = 2^n X$  であることが分かる.  $f^n(Y) = (-2)^n Y$  であることも同様に示される.

以上の計算により,

$$(f^n(X), f^n(Y), f^n(H)) = (X, Y, H) \begin{pmatrix} 2^n & 0 & 0 \\ 0 & (-2)^n & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}.$$

※定理 1 を使えば, (2) で求めた表現行列を  $n$  乗するだけでよい. ここでは敢えて面倒な計算を試した.